

かたつむり



句集

かたつむり

布村松景

夏の句

薄き日を集めて白き花菖蒲

かたつむり競ふ心はなかりけり

ロ
づ
さ
む
小
学
唱
歌
燕
の
子

紫陽花やふと振り返る傘の中

マネキンの指しなやかに更衣

茶柱に肯き新茶含みけり

石灯籠の隠し十字架走り梅雨

現世の緋牡丹色をくずしけり

野仏に指ふれてみし梅雨の中

風凧ぎし湯屋の煙突梅雨鴉

鳴き竜の睨み八方梅雨深む

濃茶ねる手元小暗き走り梅雨

終バスの灯の遠ざかる走り梅雨

首欠けし羅漢の過去や青嵐

竿船に風の音聞く半夏かな

不動明王破邪の劍や青嵐

訪ねれば友既に亡し半夏雨

鐘
つ
い
て
弥
陀
に
ま
み
え
り
菱
の
花

落し文拾ひて旅も半ばかな

夏椿激しき雨となりにけり

セルの肩少し落して聞き上手

火に耐ふる鮎の口元一文字

落ちてなほ地に咲きにけり沙羅の花

雨蛙鳴きだし法話とぎれけり

合歡咲くや低鉄棒に逆さの子

教え子も白髪混じりや合歡の花

炎昼の川面に遊ぶ箱眼鏡

受け流す愚痴もほどほど冷奴

手話交す指の速さや夏燕

十二階外科病棟の大西日

山鳩の喉を鳴らして噴井かな

鱒刺や一瞬白き急下降

磯蟹や赤いシヤベルの忘れ物

モザイクに積みしコンテナ雲の峰

夕薄暑豆腐の布目くずしけり

岩壁を二つに割って神の滝

よろず屋に箒塵取り夏燕

水やりは駅長一人鹿の子百合

著先の朱色が崩す冷奴

神田鍛冶町木箱に育つ茄子の苗

放埒の風吹き抜けし祭後

集落をつなぐ暮色や祭笛

勸行を背に下りけり梅雨清浄

逢ふことのまたかなわずや牡丹散る

師逝きて夏蝶岩に留まれり

俱会一處沙羅の花落つ石畳

原爆忌我影踏みつ歩みけり

幾筋も汗まっすぐに原爆忌

城跡に侘つや流転の夏の雲ぶ

子蟪蛄鴨居に下界睥睨す

たこ焼きのくるくる返る祭かな

炎昼の漆職人口重し

夕焼を背に棟梁の手締めかな

西日負ひ木遣りの男戻りけり

虹二重釣人時を忘れけり

木の膚に触れて涼しき小道かな

三伏や蟹も恋する橋の下

夕顔や舞妓は風呂の帰り道

羅の裾庇
いつつ
吾妻橋

見かへれば迷ひの坂や合歡の花

岩陰に恋の沢蟹忍びけり

小次郎の鬢のほつれや夏燕

大寺に続く土塀や蝉時雨

天平の礎石光らす聚雨かなり

片隅の土間の大甕糸とんぼ

菊練りに陶土息づくあいの風

夏萩や主なきあとの冠木門

日が暮れて過去引き戻す遠蛙らず

三叉路に田の神おはす薄暑かな

木喰の生木菩薩や蟬時雨

夏蝶や托鉢僧の網代笠

法樂のとんぼが越えし茅の屋根

七夕や童話の中に子は眠り

公園の迷子放送蟬時雨

佛塔に残る夕日や朴散華

煩惱は捨て去りがたし紅の花

以下秋の句へ